

# 四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書

2006年3月

四條畷市教育委員会

# 四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書

2006年3月

四條畷市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、四條畷市教育委員会が平成17年度国宝重要文化財等保存整備費補助金事業の交付を受けて担当実施した市内遺跡発掘調査等の概要報告書である。
2. 忍岡古墳は平成17年11月14日に着手し11月23日までの間現地調査を行い平成18年3月31日に整理作業を終了した。
3. 調査は、四條畷市教育委員会事務局社会教育課主任野島 稔、技術職員村上 始が担当した。
4. 現地調査の実施にあたっては、岡山自治会、忍陵神社総代の方々、高橋誠一宮司から数々のご配慮を得た。記して感謝する次第である。
5. 発掘調査の進行については、大阪府教育委員会文化財保護課、一瀬和夫、三好 玄、関西外国语大学 濑川芳則、櫻井敬夫、曇古文化研究保存会の各氏各団体から指導・助言を得た。記して感謝の意を表したい。
6. 出土遺物の整理・実測などについては、野島 稔があたった。
7. 本書の執筆は野島 稔が行った。

## 本　文　目　次

### 例　　言

第1章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	1
第2章 調査にいたる経過 .....	5
第3章 忍岡古墳発見 .....	7
第4章 調査の成果 .....	10
第5章 ま　と　め .....	21
報告書抄録 .....	23

### 図　　版

## 図 版 目 次

- 図版1 忍岡古墳周辺航空写真（昭和17年撮影）
- 図版2 第1・第2トレンチ調査前全景
- 図版3 第1・第2トレンチ調査スナップ
- 図版4 第3・第4トレンチ調査スナップ
- 図版5 第1トレンチ完掘状況
- 図版6 第2・第3トレンチ完掘状況
- 図版7 第4トレンチ完掘状況
- 図版8 第5トレンチ完掘状況
- 図版9 第6トレンチ完掘状況
- 図版10 第1トレンチ埋め戻し状況
- 図版11 古墳墳丘部埋め戻し及び養生完了状況
- 図版12 第5トレンチ内出土遺物
- 図版13 第1・第2・第6トレンチ内出土遺物
- 図版14 第6トレンチ内出土石材

## 挿 入 目 次

- 第1図 忍岡古墳周辺地形遺跡分布図 ..... 2
- 第2図 忍岡古墳調査区位置図 ..... 6
- 第3図 忍岡古墳外形略図 ..... 9
- 第4図 忍岡古墳トレンチ配置図 ..... 11
- 第5図 忍岡古墳トレンチ断面実測図 ..... 13~14
- 第6図 忍岡古墳出土遺物 ..... 18

## 第1章 遺跡の位置と歴史的環境

四條畷市は大阪府の北東部に位置する。四條畷市忍岡古墳は大阪府四條畷市岡山に所在し、飯盛山系の西側斜面から派生する海拔36mの岡山丘陵上にある。山系の西側に沿って南北に谷地形をなし、西に向って、讚良川・岡部川・清滝川・権現川が流れている。

生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は京都府八幡丘陵から南は四條畷市南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵、段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川、寝屋川市寝屋川、四條畷市讚良川・清滝川という中小河川によって開かれている。この枚方台地は、原始・古代における幾多の遺跡の存在が知られている。

### 旧石器時代

四條畷市周辺の旧石器時代の遺跡として、更良岡山遺跡の範疇である讚良川川床遺跡では、ハンドアックス・ナイフ形石器・細石器・削器・彫器などが出土している。また、四條畷市の忍岡古墳付近でナイフ形石器が採集されている。これらは枚方台地における旧石器研究上きわめて重要な位置をしめている。

### 縄文時代

四條畷市JR忍ヶ丘駅の南側にある南山下遺跡で長さ11cmの完全な有舌尖頭器が出土し、田原遺跡や、交野市神宮寺遺跡、枚方市穂谷遺跡で米粒文・山形文を施した縄文時代早期の押型文土器などが出土している。これらは近畿地方における最古の土器である。

縄文時代中期は、四條畷市南山下遺跡・砂遺跡、寝屋川市讚良川遺跡がある。讚良川遺跡では大量の船元式土器が出土した。

後期・晩期においては、四條畷市更良岡山遺跡で土偶・大型彫刻石棒・ヒスイ製石斧・土製勾玉などの祭祀具をはじめ高杯形土器・深鉢・注口土器などの土器類と多量の石器類が出土した。他に四條畷小学校内遺跡や大上遺跡・清滝古墳群で土器類や石鏃が出土している。

### 弥生時代

四條畷市雁屋遺跡で弥生時代前期の大壺（高さ78cm）が出土している。この大壺は北九州の板付II式といわれているものである。その壺に伴い石庵丁が2点出土した。そのうちの1点は奈良県耳成山の流紋岩製である。この石庵丁と大壺の出土は北河内で最初に稻作が開始されたことを示している。なお、この調査区の50m東で縄文時代晩期末の深鉢が出土している。その他、前期の遺跡は四條畷小学校内遺跡と四條畷市田原遺跡がある。



- |            |            |             |               |
|------------|------------|-------------|---------------|
| 1. 忍岡古墳    | 9. 讀良郡条里遺跡 | 17. 南野米崎遺跡  | 25. 大上遺跡      |
| 2. 奈良井遺跡   | 10. 北口遺跡   | 18. 楠公遺跡    | 26. 四條畷小学校内遺跡 |
| 3. 正法寺跡    | 11. 奈良田遺跡  | 19. 坪井遺跡    | 27. 木間池北方遺跡   |
| 4. 讀良川床遺跡  | 12. 莢屋遺跡   | 20. 忍ヶ丘駅前遺跡 | 28. 城遺跡       |
| 5. 讀良寺跡    | 13. 錆田遺跡   | 21. 南山下遺跡   | 29. 近世墓地      |
| 6. 更良岡山遺跡  | 14. 中野遺跡   | 22. 岡山南遺跡   | 30. 南野遺跡      |
| 7. 更良岡山古墳群 | 15. 墓ノ堂古墳  | 23. 清滝古墳群   | 31. 飯盛山城跡     |
| 8. 砂遺跡     | 16. 雁屋遺跡   | 24. 国中神社内遺跡 | 32. 萩屋北遺跡     |

第1図 忍岡古墳周辺地形遺跡分布図

中期における雁屋遺跡は拠点的集落として機能した。雁屋遺跡で多数の方形周溝墓が確認され、コウヤマキ・ヒノキ・カヤなどの木棺が出土した。なかでもコウヤマキ製のものは完全な姿で出土した。ヒノキの木棺から完全な人骨も出土した。方形周溝墓の溝から墓前祭祀に使われた朱塗りの壺や把手付碗などが出土した。木製品では、双頭渦文が彫刻された蓋付四脚容器などがある。材質はヤマグワで朱彩されていたが、現在は朱の痕跡を確認することはできない。その他、ノグルミ製鳥形木製品は墓で使われた最初の発見であった。また大阪府教育委員会の雁屋遺跡発掘調査でも集落内から鳥形木製品が出土している。

石製品は大量に出土しているが、特筆すべきものは銅鐸の舌が2本出土していることである。そのうちの1本は徳島県吉野川産の塩基性凝灰岩質点紋片岩製である。銅鐸については、「明治44年に、砂岡山から入れ子になった銅鐸2口が出土した」と伝えられる砂山銅鐸2口があるが、関西大学の所蔵となっている。

その他、分銅形土製品が2点出土している。

後期の雁屋遺跡は日本海側と交流を持つ活発な集落となった。丹後・北陸地方の様式をもつ把手付き鉢（住居跡）や脚付き鉢（円形周溝墓）、出雲の様式をもつ低脚杯（包含層）がそれを示している。

大阪府内でもこのように活発な交流をした遺跡は見当たらず、拠点的集落として存在した重要な遺跡である。

## 古墳時代

古墳時代前期に築造された全長約87mの前方後円墳忍岡古墳がある。この古墳の竪穴式石室は覆屋で保存され見学できるが、覆屋が老朽化し建て直しされ平成14年12月に完成した。この古墳築造に関わった集落は確認されていないが今後の調査で発見できる可能性がある。

古墳時代中期になると四條畷市を中心にして馬の飼育が始まった。馬は朝鮮半島から運ばれ、渡来系の人々によって牧場が開かれた。

古墳時代の四條畷市は飯盛山系が南北に走り、山麓の西方2kmほどで河内湖となる。生駒山系から、讚良川・岡部川・清滝川・権現川が河内湖に注ぎ、この川が自然の柵となり牧場に適した環境であった。

鎌田遺跡では楽器のスリザサラや祭具を載せる台が、奈良井遺跡では犠牲馬の首をはじめ儀式で使われた人形・馬形の土製品やミニチュア土器が出土している。最近では大阪府教育委員会の調査による藤屋北遺跡で大量の製塙土器、馬具の鐙、籠轡、準構造船をリサイクルした井戸枠、一体分の埋葬馬が出土し注目されている。四條畷小学校内遺跡・奈良井遺跡・中野遺跡・木間池北方遺跡などで初期須恵器をはじめ韓式土器や韓式系土器が数

多く出土し、渡来系の人々の存在を示している。

古墳については、墓ノ堂古墳をはじめ、馬銅の人々が墓域とした清滝古墳群や大上古墳群など次々と築造された。大上古墳群からは横穴式石室が発見されたが、鎌倉時代に盗掘され遺物のほとんどは失われていたが金銅装中空耳環が片方出土した。その他の古墳で多数の副葬品が出土している。埴輪の出土については、ほとんどが円筒埴輪である。

形象埴輪のほとんどは集落遺跡から出土したものである。忍ヶ丘駅前遺跡で人物埴輪・仔馬形埴輪（オスの仔馬）・水鳥形埴輪、南山下遺跡で馬形埴輪、岡山南遺跡で家形埴輪が出土している。なお、家形埴輪に伴って左足用の日本最古の木製下駄が出土している。古墳からの出土した形象埴輪は、忍ヶ丘駅前1号墳で琴を弾く男性埴輪などがある。

## 奈良時代

古墳時代に飯盛山系山麓に築かれた古墳群が、奈良時代の正法寺建立の際に整地されることにより破壊されており、ほとんどの主体部が削平されている。

正法寺跡周辺では近年奈良時代の遺跡が発見されている。木間池北方遺跡の河川から円面鏡や土器と共に土馬が7体出土した。南野遺跡では「大」の字を墨書した土器が出土した。

城遺跡では通産省との合同地震調査が行われ、生駒断層の跡が発見された。この断層の研究の結果、断層の上の層から奈良時代の須恵器杯が出土し、地震は奈良時代以前におこったと判断できた。その後、炭素年代法の分析から地震は縄文時代から弥生時代ごろであったことが判明した。近年、考古学と地質学が共同で研究する地震考古学が注目され地震予知の研究がなされている。

## 平安時代

平安時代には井戸が多く発見されるようになるが、中野遺跡（平成3年調査）では「如月廿日」の墨書曲物が出土し、岡山南遺跡では「高田宅」「福万宅」などの墨書土器が井戸から出土している。

また、上清滝遺跡では「塔の坊」の小字名が残る一番高い場所に方形基壇が確認され、その上に二間×二間の祠堂が建てられていた。この基壇の近くの斜面の溝から仏具などが発見された。木製聖観音立像二体・金箔製光背・木簡などの仏具、茶道具の茶釜・茶臼・中国陶磁器・天目茶碗・下駄・将棋の駒、そして門前で飲み食いしたであろう食器類の瓦器碗・土師器皿・箸が多量に発見された。

また、この溝で木簡も出土している。寿永三年（1184）の年号が書かれていた題箋軸や「はせのたね」と稲の品種をかいた荷札が見つかっている。

## 第2章 調査にいたる経過

### 忍岡古墳

大阪府史跡忍岡古墳は四條畷市岡山二丁目、JR忍ヶ丘駅の西方約300mの丘陵上に位置している。

この古墳の発見は、昭和9年9月の室戸台風の際に忍陵神社が倒壊し、翌年の再建工事中に石室が露出したことから始まる。そこで京都大学が発掘調査にあたり古墳時代前期の古墳であることが判明した。副葬品については、すでに盗掘されていたものの碧玉製の紡錘車・鍬形石・石鉗、青の部材である小札・刀子・鉄斧などの石製品が出土した。その時に石室内から埴輪片も採集されている。

京都大学による発掘調査後、地元の人々の努力によって石室を保護する覆屋が建てられ、大切に保存されていたが、老朽化と平成7年の神戸大震災によって覆屋が西側に傾き、忍陵神社の社殿側に倒壊のおそれがあり、石室覆屋を再建することになった。

平成14年に宗教法人忍陵神社から大阪府史跡忍岡古墳の現状変更手続きが行われ、古墳石室を67年ぶりに掃除を行い、石室内外の写真撮影と覆屋に伴う基礎部分の立ち合い調査をした。また、平成14年度国宝重要文化財等保存整備費補助事業として墳丘部の身障者用の道路拡張に伴う発掘調査を実施した。発掘調査は、前方後円墳の後円部の東北部に長さ14.4mの第1トレチを設定した。トレチの南側断面観察を行った結果、堆積土層は安定した土であるのに対し、その上層の土は古墳築造以降に人為的に触られていると思われる。

平成17年度の国宝重要文化財等保存整備費補助事業は「日本古文化研究報告第4・近畿地方古墳墓の調査二・第二河内四條畷村忍岡古墳」で忍岡古墳の発見の経緯と古墳墳丘部の形状等を参考にして、後円部の墳丘北側斜面及びくびれ部の保存状態を確認するため、平成17年11月14日から11月23日まで現地発掘調査を行うこととなった。

しかし、墳丘部北側の斜面には、樹木や雑木が生い茂り、墳丘上には落ち葉による腐食土が急傾斜により土砂の流失によって、崩落がおこっている場所が多く認められ、墳丘部に建てられている忍陵神社の本殿に影響を及ぼす可能性が出てきたため、墳丘部北側の土砂流失した部分を中心に土糞による養生保護を神社側によって行われ、全ての事業が平成18年3月31日に終了した。



第2図 忍岡古墳調査区位置図

### 第3章 忍岡古墳発見

大阪府立寝屋川高等女学校長・大阪府史蹟名勝天然記念物調査委員であった、平尾兵吾先生が忍岡古墳発見前の昭和6年に刊行された北河内史蹟史話の甲可村の中に、忍陵神社について、以下のように紹介されている。

甲可村大字岡山忍岡の最高地に鎮座す、熊野大神、應神天皇、藤原鎌足を祀つてある。本社は津鉢神社と称し、延喜式内の古社であつて、もと岡山の東方丘陵たる赤山の西南麓にあったが、何時の頃にか（これは徳川時代と思はれる）今の地に移され、舊地は社地として森林も存して居たが、明治の末年に處置されて、民有地となつた、明治五年村社に列し、四十四年、馬守神社、大將軍社を合併して、今の社名に改め、供進社に指定された。と紹介されている。

次に、忍岡古墳発見の経緯及び調査について梅原末治博士によって「日本古文化研究報告第4・近畿地方古墳墓の調査二・第二河内四條畷村忍岡古墳」で詳しく報告されている。その一部を引用してここに紹介する。

河内国北河内郡四條畷村の北部、甲可村の地内に忍岡なる丘陵がある。これは大阪平野の東界を限る山丘に添ふて發達した古期洪積層の台地の一であつて、標高約40mに過ぎないが、西方の眺望まことによく、一の勝地をなしている。また陸上に氏神の忍陵神社が鎮座している。この忍陵神社の社殿が昭和9年9月に近畿を襲つた台風で倒壊して、翌10年に入つて復旧の為に、基礎工事にとりかかった所、4月の下旬に拝殿の地下2~3尺の所で偶然石室の一部を発見、その地域の古墳であることが新たに注意せられることになった。右の発見の報を得て大阪府史蹟調査委員会では委員を派遣して一応の調査を行つたのであると報告されている。

この発見は、社殿の基礎工事を請負つた奥村氏であつて、はじめて石室の材を見出したのは昭和10年4月21日で、同25日に至つて南半分に遺存した天井石を検出した。4月29日に大阪府から調査委員の平尾兵吾氏が出かけ、ついで5月1日には、岸本・平尾・寺阪氏らが遺跡の大体の性格を確かめ、5月3日早朝から京都大学の梅原博士らが現地にて各部の調査実測を1日費やし、出土した遺物は一時京都大学に借受けて精査したと書かれている。

また、位置と外形については、岡の北西隅に丘の一部を削つて大正寺が建ち、南西の最高所が鎮守の社となっている。新たに見つかった古墳がこの社を中核とするものである。

この塚はその上に社殿を営む際には上部を削平され、北の方の寺院が建設された時にもいろいろと原形に変改が加えられたため、今日まで古墳であったことが忘れられていた。

実地においてみると社殿のあった部分は上部こそ平坦にされているが元は截頭円錐状を

呈して、石室の発見がなくても古墳とする推測の出来る外形をしていた。西側の一部に基段が良く原形を保ち、北方には低いながら封土がのびて、本来の墳丘は北向きの前方後円墳であったことが認められる。前方部にあたる部分は小徑があり、また寺の庫裡や鐘樓、墓地等のため著しくもとの地形が崩されているので、原形を明確にすることは困難であるが、前方後円墳のクビレ部に当たる所の両側には幅10尺内外の窪地があって、それは、濠の名残りと見られる。この窪地は東側では後円丘から約10間の所で西に喰い込み、小溝がさらにそれから西に通じて同部に添えた小徑の所で段をなしている。あるいは、前方部はここまでではないかとの推測を加へしめる。ただし後円丘の大きさや高さ等から見ると、前方部はさらにそれよりも北に延びて、いま鐘樓のある辺を前丘の端とするのが妥当であると思われる。果たして然ならば本古墳は後円部の径約150尺、現高20尺、主軸の長さが280~290尺となって、前方部と後円丘との均衡の取れた相当大きな規模のものである。

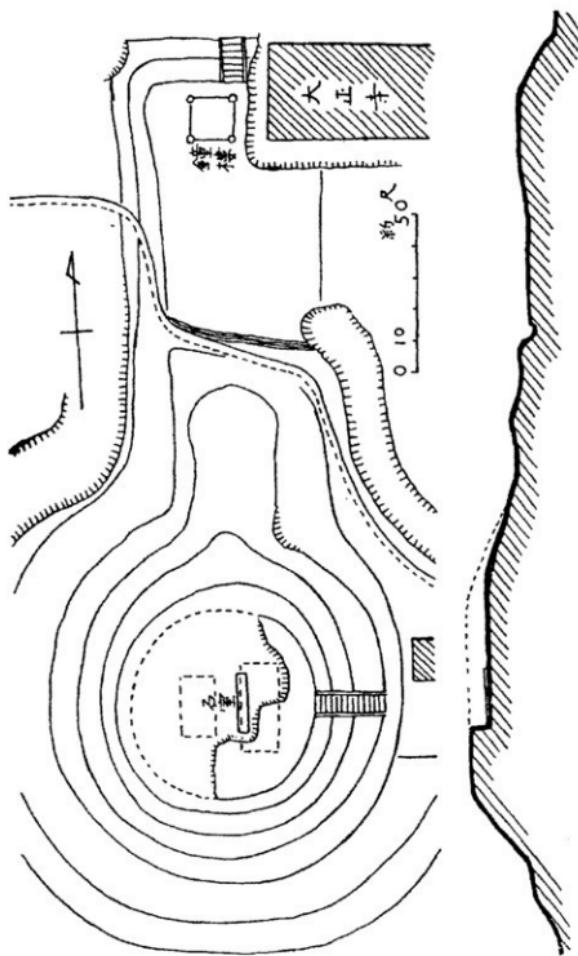
現状に若干の推測を試みると本来の墳丘を考えて見ると、下辺に緩やかな傾斜をもつ高さ7尺内外の低い基段があって、その周囲に界を劃する窪所が続き、その基段上に高い主丘が營まれたと解される。この主丘は後円では高さ20数尺に達して傾斜のやや急なものであるが前方部はその半ば位の高さであったろう。現在の後円は著しく削平された様に見えるが、石室の位置等から考えると削られた部分は10尺を越えたとも思われないから、同部の形はもとから截頭円錐形をなしていたと思われる。以上の外形がどの程度まで築かれていたものであるかはわかつに明けになし難しいが、後円の中央に穿たれた穴壁の工合からすると少しも封土は石室の下にも及んでいるのであって、割合に築成の部分が多いように見える。

我々の見た限りでは、現在封土の表面に葺石の名残と思われる石材等の散在なく、また埴輪円筒片も見当たらなかった。埴輪の破片が石室の崩壊した部分から出土しているので、本来円筒のあったことは確實である。この種の外部施設こそ神社の建設その他のために早く破壊されたのである。と書かれている。

石室の構造及び残存の遺物については割愛いたします。

注釈には墳丘の周囲には多く竹藪であるあるが、塚の部分には松樹があつて鎮守の杜にふさわしく、その所在を明示している。

注釈の最後に、本古墳の主体たる石室の位置は、恰も改築される神社の拝殿の一部に当たるので、その保存が当初困難のように見受けられた。処が後で平尾兵吾氏から聞くと、地元の人たちは、我々の説明に依ってその重要な史蹟であることを知り、特に拝殿一部の設計をすら変更して、現状保存することに決し、残存の石室壁はもとよりの事、細長い粘土床にも覆いの屋根を設けてという。これは史蹟保存の見地から誠に喜ばしい事であるので、終わりに記して置く。と書かれています。



第3図 忍岡古墳外形状略図

## 第4章 調査の成果

### 調査の成果（第4図～第6図・図版2～図版11）

忍岡古墳墳丘部北側は、急斜面であり第1トレンチ調査後に埋め戻しを行った際、昭和10年に古墳発見の契機となった式内社忍陵神社本殿北側のコンクリート及び墳丘肩部に設置している排水用U字溝等が以前から亀裂を起こしており、古墳北側が地すべりの危険が生じたため、文化財調査後に墳丘北側の斜面に土糞による養生を行い、今回の現状変更の事業を完了した。

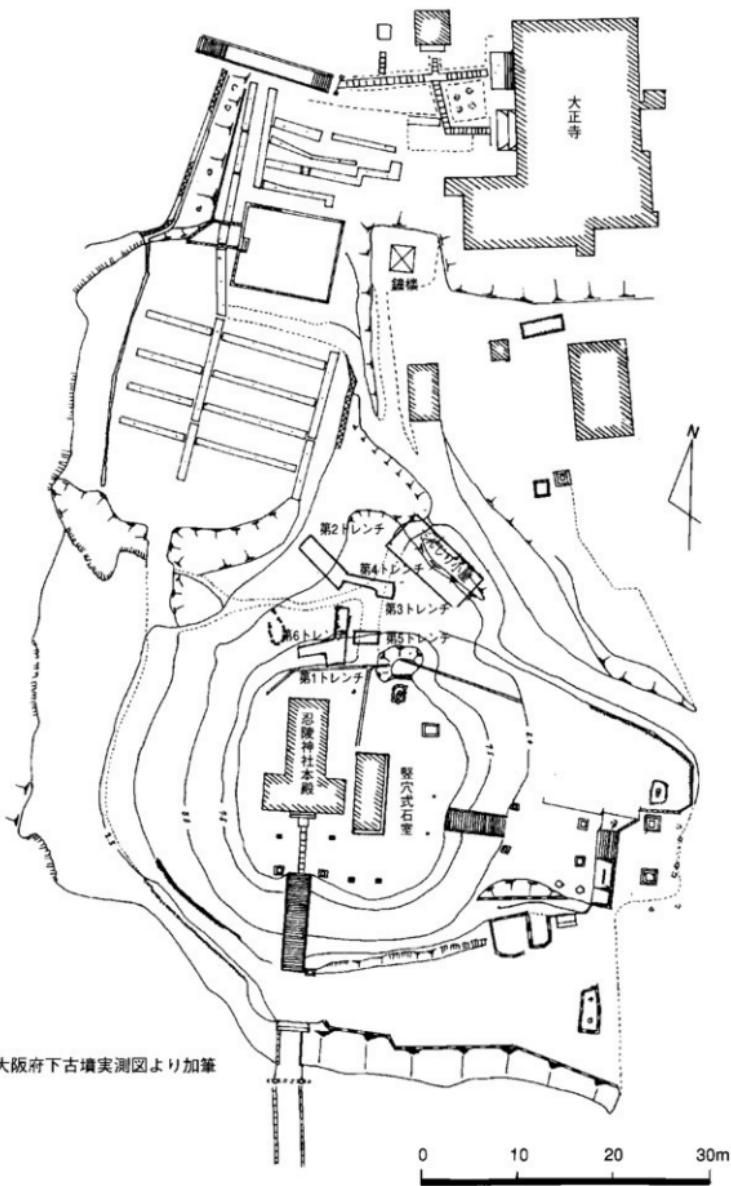
現状変更等の申請を行った北側墳丘部に第1トレンチ、くびれ部に第2トレンチ、後円部と前方部の接点に第3トレンチの3ヶ所のトレンチによる確認調査を計画して実施した。

調査の進行状況の中で、詳細に確認するために第2トレンチと第3トレンチをつなぐ形で第4トレンチを設定。第1トレンチの両側の墳丘部斜面に第5トレンチと第6トレンチを追加して合計6ヶ所のトレンチを設定した。各トレンチの概要は以下の通りである。

#### 第1トレンチ（第4図～第5図・図版2～図版3・図版5）

後円部北側斜面に、墳丘主軸方向に長さ6.2m、幅1.8mを設定した。トレンチの東側断面の基本層序は次のとおりである。

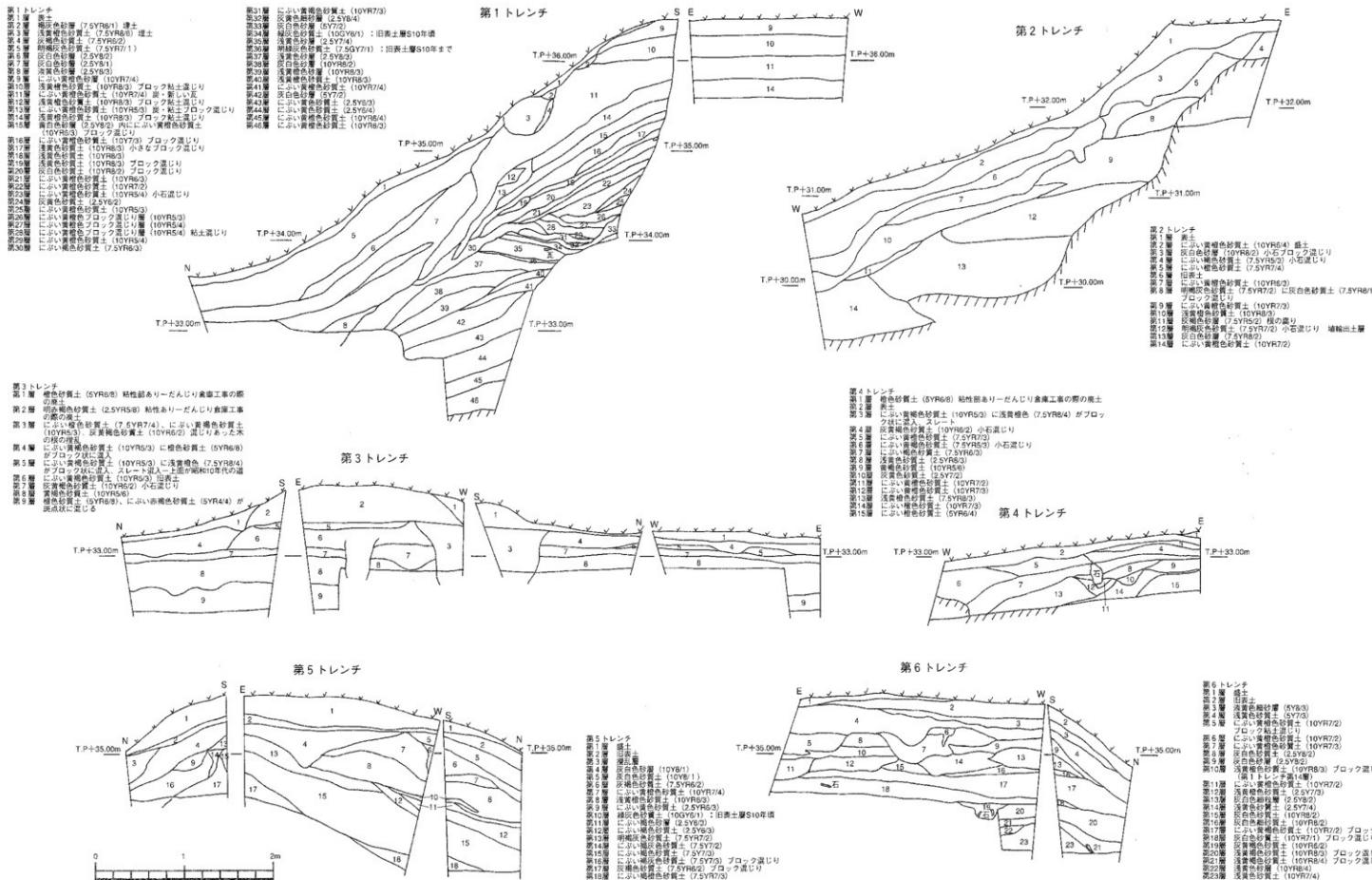
- 第1層 表土で厚さは、約8cmである。墳丘部の一番高い場所でT・P+36.48mである。
- 第2層 褐灰色砂層（7.5YR6/1）「サカキ」の木の根の埋土である。
- 第3層 浅黄橙色砂質土（7.5YR8/6）「サカキ」の木の根の埋土である。
- 第4層 灰褐色砂質土（7.5YR6/2）「サカキ」の木の根の埋土である。
- 第5層 明褐灰色砂質土（7.5YR7/1） 第1層の北下方、厚さ約30cmである。第5層から第8層の淡黄色砂層（2.5Y8/3）は擁壁工事の際の埋め戻し土である。
- 第6層 灰白色砂層（2.5Y8/2） 厚さ約12cmである。
- 第7層 灰白色砂層（2.5Y8/1） 厚さ約50cmである。
- 第8層 淡黄色砂層（2.5Y8/3） 厚さ約10cm以上である。擁壁工事の最下段の土と思われる。
- 第9層 にぶい黄橙色砂層（10YR7/4） 墳頂部側で約18cmである。忍陵神社境内地の整地層。
- 第10層 浅黄橙色砂質土（10YR8/3） ブロック粘土混じり層で、墳頂部側で約22cmである。
- 第11層 にぶい黄橙色砂質土（10YR7/4） 墳頂部側で厚さ約22cm、斜面側で約50cmの堆積である。この土層は当初安定した古墳の堆積土層と考えていたが、新しい平瓦片・炭が出土したことから、埋め戻された土層と判明した。



大阪府下古墳実測図より加筆

第4図 忍岡古墳トレンチ配置図

- 第12層 浅黄橙色砂質土（10YR8/3）ブロック粘土混じり層で、ブロック状に厚さ約10cmである。
- 第13層 にぶい黄橙色砂質土（10YR5/3）炭・粘土ブロック混じり層で、ブロック状に厚さ約10cm～20cmである。
- 第14層 浅黄橙色砂質土（10YR8/3）ブロック粘土混じり層で、墳頂部側に厚さ約20cmである。
- 第15層 黄白色砂層（2.5Y8/2）内ににぶい黄橙色砂質土（10YR6/3）ブロック混じり層で厚さ約10cmである。
- 第16層 にぶい黄橙色砂質土（10Y7/3）ブロック混じり層で、厚さ約8cm～18cmである。
- 第17層 浅黄色砂質土（10YR8/3）小さなブロック混じり層で、厚さ約10cmである。
- 第18層 浅黄色砂質土（10YR8/3）厚さ約6cmである。
- 第19層 浅黄色砂質土（10YR8/3）ブロック混じり層で、ブロック状に厚さ約6cmである。
- 第20層 灰白色砂質土（10YR8/2）ブロック混じり 厚さ約5cm～15cmである。墳頂部側から新しい瓦片が出土。
- 第21層 にぶい黄橙色砂質土（10YR6/3）墳頂部側に厚さ約10cmである。
- 第22層 にぶい黄橙色砂質土（10YR7/2）で厚さ約10cmである。第14層から第22層の層位角度が115度の傾斜であり、忍陵神社建設時の造成によって北側斜面に埋められた土であると考えられる。
- 第23層 にぶい黄橙色砂質土（10YR5/4）小石混じりで厚さ約30cmである。
- 第24層 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）厚さ約8cmである。
- 第25層 にぶい黄橙色砂質土（10YR5/3）厚さ約6cmである。
- 第26層 にぶい黄橙色ブロック混じり層（10YR5/3）厚さ約10cmである。
- 第27層 にぶい黄橙色ブロック混じり層（10YR5/4）厚さ約5cmである。
- 第28層 にぶい黄橙色ブロック混じり層（10YR5/4）粘土混じりで厚さ約12cmである。
- 第29層 にぶい黄橙色砂質土（10YR5/4）厚さ約4cmである。
- 第30層 にぶい褐色砂質土（7.5YR6/3）厚さ約12cmである。
- 第31層 にぶい黄褐色砂質土（10YR7/3）厚さ約12cmである。
- 第32層 灰黄色細砂層（2.5Y8/4）厚さ約4cmである。
- 第33層 灰白色砂層（5Y7/2）厚さ約5cm～10cmである。
- 第34層 緑灰色砂質土（10GY6/1）昭和10年頃の旧表土層である。
- 第35層 浅黄色砂層（2.5Y7/4）厚さ約15cmである。新しい平瓦が出土。
- 第36層 明緑灰色砂質土（7.5GY7/1）昭和10年頃までの旧表土層で厚さ約4cmである。
- 第37層 浅黄色砂層（2.5Y8/3）厚さ約10cm～22cmである。新しい平瓦が出土。



第5図 忍岡古墳トレンチ断面実測図

- 第38層 灰白色砂層（10YR8/2）厚さ約20cmである。新しい平瓦片が出土。
- 第39層 浅黄橙色砂層（10YR8/3）厚さ約22cmである。新しいコンクリート片が出土。この第39層までの層位が古墳築造以降に再三にわたり工事等で斜面の盛り土が行われたことが出土する新しい瓦等から判明した。
- 第40層 浅黄橙色砂質土（10YR8/3）厚さ約10cmである。古墳築造段階の盛り土である。
- 第41層 にぶい黄橙色砂質土（10YR7/4）厚さ約15cmである。
- 第42層 灰白色砂層（5Y7/2）厚さ約20cmである。
- 第43層 にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）厚さ約20cmである。
- 第44層 にぶい黄色砂質土（2.5Y6/4）厚さ約30cmである。コンクリート片出土。
- 第45層 にぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）厚さ約15cmである。第45層から第46層の傾斜角約27度の傾斜をなし、忍岡古墳築造段階の盛り土であると考えられる。
- 第46層 にぶい黄橙色砂質土（10YR6/3）厚さ約30cmである。このトレンチで初めて土師器片と埴輪片（第6図-8）が出土した。この第46層下で地山を確認した。

## 第2トレンチ（第4図～第5図・図版2～図版3・図版6）

くびれ部西側斜面に長さ5.4m、幅2mを設定した。トレンチの北側断面の基本層序は次のとおりである。

- 第1層 表土で厚さは約5cm～30cmである。くびれ部の一番高い場所でT・P+32.95mである。
- 第2層 にぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）厚さ約10cm～42cmである。
- 第3層 灰白色砂層（10YR8/2）小石ブロック混じり層で厚さ約6cm～35cmである。
- 第4層 にぶい褐色砂質土（7.5YR5/3）小石混じり層で厚さ約30cmである。断面東側第4層下で灰白色砂層（2.5Y8/1）の地山岩盤を確認した。
- 第5層 にぶい橙色砂質土（7.5YR7/4）厚さ約10cm～20cmである。
- 第6層 旧表土層で厚さ約10cm～20cmである。断面1ヶ所に根による搅乱がある。
- 第7層 にぶい黄橙色砂質土（10YR6/3）厚さ約15cmである。
- 第8層 明褐灰色砂質土（7.5YR7/2）に灰白色砂質土（7.5YR8/1）ブロック混じり 厚さ約25cmである。
- 第4層下で確認した地山は、第5層及び第8層の東側において同様の地山斜面を確認した。地山岩盤の傾斜角は40度である。
- 第9層 にぶい黄橙色砂質土（10YR7/3）厚さ約50cmである。第9層東側の断面で灰白色砂礫層（2.5Y8/1）の地山を確認した。地山の傾斜角約70度の傾斜をなしている。

- 第10層 浅黄橙色砂質土（10YR8/3）厚さ約10cm～30cmである。
- 第11層 灰褐色砂層（7.5YR5/2）根の腐りで厚さ約10cmである。
- 第12層 明褐灰色砂質土（7.5YR7/2）小石混じり、厚さ約40cm～50cmで円筒埴輪片（第6図-9・10）が出土した。第12層東側の断面で灰白色砂礫層（10YR8/1）の地山岩盤を確認した。地山の傾斜角約30度の傾斜をなしている。
- 第13層 灰白色砂層（7.5YR8/2）厚さ約60cm以上である。第13層東側の断面で灰白色砂層（7.5YR8/1）の地山岩盤を確認した。地山の傾斜角約70度の傾斜をなし、急傾斜を呈するが、下層でくびれ部下段部を確認した。
- 第14層 にぶい黄橙色砂質土（10YR7/2）厚さ約60cm以上である。

### 第3トレンチ（第4図～第5図・図版4・図版6）

後円部と前方部の接点に長さ1.3m、幅1.3mを設定した。トレンチの南側断面の基本層序は次のとおりである。

- 第1層 橙色砂質土（5YR6/8）粘性部あり、だんじり倉庫工事の際の廃土、厚さは約5cm～30cmである。墳丘部の一番高い場所でT・P+33.8mである。
- 第2層 明赤褐色砂質土（2.5YR5/8）粘性あり－だんじり倉庫工事の際の廃土、厚さ約42cmである。
- 第3層 にぶい橙色砂質土（7.5YR7/4）、にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）、灰黄褐色砂質土（10YR6/2）  
混じりあった木の根の搅乱、厚さ約50cm以上である。
- 第4層 にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）に橙色砂質土（5YR6/8）がブロック状に混入、  
厚さ約10cmである。
- 第5層 にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）に浅黄橙色（7.5YR8/4）がブロック状に混入、  
スレート混入－上面が昭和10年代の神社参拝者用の道である。
- 第6層 にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）旧表土、厚さ約20cmである。
- 第7層 灰黄褐色砂質土（10YR6/2）小石混じる。厚さ約10cmである。
- 第8層 黄褐色砂質土（10YR5/6）厚さ約30cmである。
- 第9層 橙色砂質土（5YR6/8）、にぶい赤褐色砂質土（5YR4/4）が斑点状に混じる。厚さ約30cm以上である。

### 第4トレンチ（第4図～第5図・図版4・図版7）

くびれ部に設定した第2トレンチと後円部と前方部接続部分の第3トレンチの基本層序

の結果、古墳築造段階の層位がはっきりしないため、第2・第3トレンチをつなぐ形で第4トレンチを設定した。長さ2.9mを設定した。トレンチの北側断面の基本層序は次のとおりである。

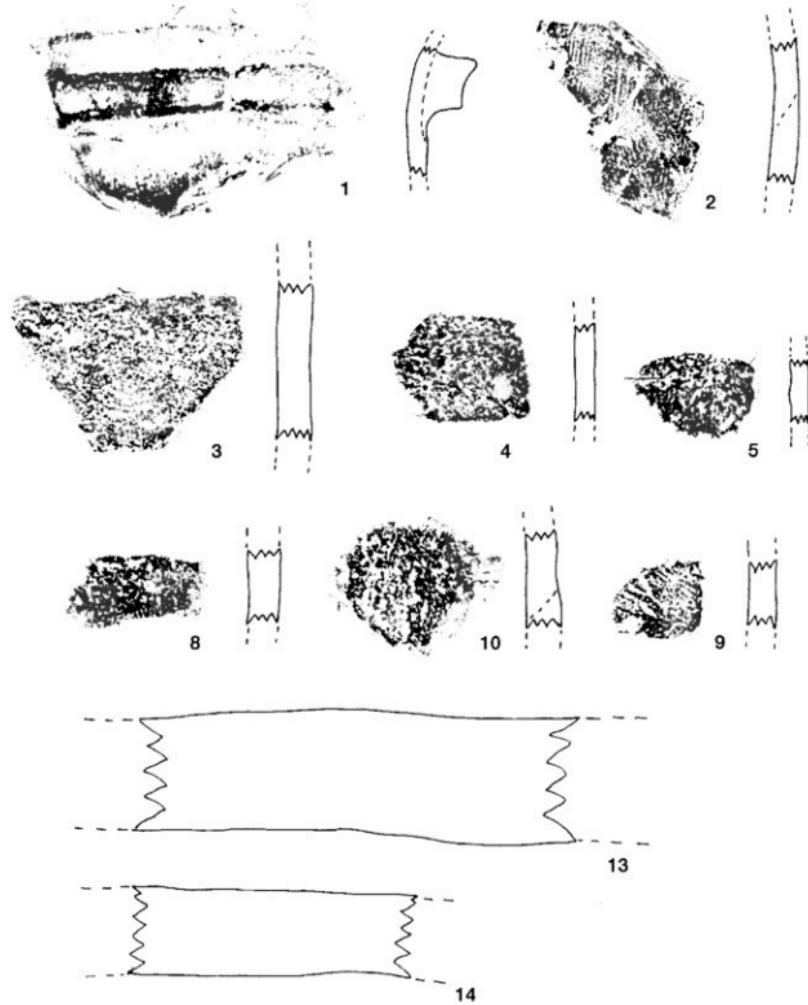
- 第1層 橙色砂質土（5YR6/8）粘性部あり、だんじり倉庫工事の際の廃土、厚さは約5cmである。墳丘部の一一番高い場所でT・P + 33.28mである。
- 第2層 表土層 厚さ約10cmである。
- 第3層 にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）に浅黄橙色（7.5YR8/4）がブロック状に混入、スレート、厚さ約6cmである。
- 第4層 灰黄褐色砂質土（10YR6/2）小石混じり、厚さ約10cmである。
- 第5層 にぶい黄橙色砂質土（7.5YR7/3）厚さ約15cmである。
- 第6層 にぶい黄褐色砂質土（7.5YR5/3）小石混じり、厚さ約40cm～50cmである。断面西側第6層下で灰白色砂層（2.5Y8/1）の地山を確認した。
- 第7層 にぶい褐色砂質土（7.5YR6/3）。厚さ約4cm～30cmである。断面中央において高さ26cm、幅15cmの立石を確認した。この石は、下層の第8層から立てられている。
- 第8層 浅黄色砂質土（2.5YR8/3）厚さ約12cmである。立石は直立した状態で確認された。
- 第9層 黄褐色砂質土（10YR5/6）。厚さ約15cmある。
- 第10層 灰黄色砂質土（2.5Y7/2）厚さ約10cmである。
- 第11層 にぶい黄橙色砂質土（10YR7/2）厚さ約6cmである。
- 第12層 にぶい黄橙色砂質土（10YR7/3）厚さ約10cmである。
- 第13層 浅黄橙色砂質土（7.5YR8/3）厚さ約10cm～30cmである。立石を境に上層の第7層同様に西側に傾斜角約10度～15度の傾斜が認められる。
- 第14層 にぶい橙色砂質土（10YR7/3）厚さ約10cmである。
- 第15層 にぶい橙色砂質土（5YR6/4）厚さ約20cmである。

## 第5トレンチ（第4図～第5図・図版8）

後円部の北側に設定した第1トレンチの基本層序で第1層から第35層まで、約2.2mの盛り土を確認した。この盛り土の範囲を確認するために、第1トレンチの東側に東西方向にサブトレンチの第5トレンチを、神社造成時における盛り土の範囲を把握するために設定した。

第5トレンチの長さ2.2m、幅1.1mを設定した。トレンチの南側断面の基本層序は次のとおりである。

- 第1層 盛土 厚さは約30cmである。墳丘部の一一番高い場所でT・P + 35.65mである。



第6図 忍岡古墳出土遺物

- 第2層 旧表土 厚さ約6cmである。
- 第3層 攪乱層、厚さ約25cmである。
- 第4層 灰白色砂層（10Y8/1）厚さ約10cm～40cmである。上面が昭和10年代の神社参拝者用の道である。
- 第5層 灰白色砂質土（10Y8/1）厚さ約12cmである。
- 第6層 灰褐色砂質土（7.5YR6/2）厚さ約5cm～30cmである。
- 第7層 にぶい黄橙色砂質土（10YR7/4）厚さ約10cm～25cmである。
- 第8層 浅黄橙色砂質土（10YR6/3）厚さ約30cmである。
- 第9層 にぶい黄色砂質土（2.5YR6/3）厚さ約15cmある。
- 第10層 緑灰色砂質土（10GY6/1）昭和10年頃の旧表土層で厚さ約10cmである。
- 第11層 にぶい褐色砂層（2.5Y6/3）厚さ約6cmである。
- 第12層 にぶい褐色砂質土（2.5Y6/3）厚さ約10cm～20cmである。
- 第13層 明褐色灰色砂質土（7.5YR7/2）厚さ約20cmである。
- 第14層 にぶい褐色灰色砂質土（7.5Y7/2）は、東壁でブロック状に幅15cm、厚さ約20cmである。
- 第15層 にぶい褐色砂質土（7.5Y7/3）厚さ約20cm～60cmである。円筒埴輪のタガ部分（第6図-1）と円筒埴輪片（第6図-2～5）が数点出土している。この土層は、古墳築造時の安定した土層である。
- 第16層 にぶい褐色灰色砂質土（7.5Y7/3）ブロック混じり、厚さ約22cmである。
- 第17層 灰褐色砂質土（7.5YR6/2）ブロック混じり、厚さ約20cmである。
- 第18層 にぶい褐色砂質土（7.5YR7/3）厚さ約10cmである。
- 第17層及び第18層下層において、古墳墳丘部傾斜角約25度の傾斜をなしている。

#### 第6トレンチ（第4図～第5図・図版9）

第5トレンチ同様に、第1トレンチの盛り土の範囲を確認するために、第1トレンチの西側に東西方向にサブトレンチの第6トレンチを設定して、神社造成時における盛り土の範囲を把握するために設定した。第6トレンチの長さ2.7m、幅1.0mを設定した。トレンチの南側断面の基本層序は次のとおりである。

- 第1層 盛土 厚さは約6cmである。墳丘部の一番高い場所でT・P + 35.68mである。
- 第2層 旧表土 厚さ約20cmである。
- 第3層 淡黄色細砂層（5Y8/3）厚さ約10cmである。
- 第4層 灰浅黄色砂質土（5Y7/3）厚さ約10cm～30cmである。
- 第5層 にぶい黄橙色砂質土（10YR7/2）ブロック粘土混じり厚さ約20cmである。

- 第6層 にぶい黄橙色砂質土（10YR7/2）厚さ約10cmのブロックである。
- 第7層 にぶい黄橙色砂質土（10YR7/3）厚さ約10cm～25cmである。
- 第8層 灰白色砂質土（2.5Y8/2）厚さ約14cmである。
- 第9層 灰白色砂層（2.5Y8/2）厚さ約10cmである。
- 第10層 浅黄橙色砂質土（10YR8/3）ブロック混じり（第1トレンチ第14層）厚さ約10cmである。
- 第11層 にぶい黄橙色砂質土（10YR7/2）厚さ約20cmである。
- 第12層 浅黄橙色砂質土（2.5Y7/3）厚さ約15cmである。
- 第13層 灰白色細粒層（2.5Y8/2）厚さ約20cmである。
- 第14層 浅黄色砂質土（2.5Y7/4）厚さ約20cmである。
- 第15層 灰白色砂質土（10YR8/2）厚さ約10cmである。
- 第16層 灰白色細砂質土（10YR8/2）厚さ約5cm～10cmである。
- 第17層 にぶい黄褐色砂質土（10YR7/2）ブロック混じり 厚さ約10cm～30cmである。
- 第18層 灰白色砂質土（10YR7/1）ブロック混じり 厚さ約15cmである。安山岩質の板石が出土している。この石材は、竪穴式石室の石材と同じである。
- 第19層 灰黄褐色砂質土（10YR6/2）幅60cm、深さ20cmの甌みである。この中から、花崗岩質の石と竪穴式石室の安山岩質の石材（第6図-13・14）が出土した。
- 第20層 浅黄褐色砂質土（10YR8/3）ブロック混じり 厚さ約15cm～30cmである。
- 第21層 浅黄褐色砂質土（10YR8/4）ブロック混じり 厚さ約5cm～15cmである。この層の下層面からコンクリート片が出土した。
- 第22層 浅黄色砂層（10YR8/4）厚さ約10cmである。
- 第23層 浅黄色砂質土（10YR7/4）厚さ約30cmである。

#### 出土遺物（第6図・図版12～図版14）

昭和10年の忍岡古墳発見時に竪穴式石室内から円筒埴輪の細片が出土している。今回の調査でも、第5トレンチから円筒埴輪（第6図-1～5）が出土している。1は、突帯の断面形態は幅1.5cm、高さ1.3cmの断面方形で突出度の高いものが出土した。2は、厚さ0.8cmで外面はタテハケおよびナナメハケがみられる。3は、厚さ1cmで外面はタテハケがみられる。4・5は、厚さ0.7cmである。第1トレンチの盛土内から円筒埴輪片（第6図-8）が出土。厚さ0.8cmで外面はタテハケで彩色が認められる。第2トレンチから円筒埴輪片（第6図-9～10）が出土。厚さ1cmで外面はタテハケおよびナナメハケがみられる。（第6図-13～14）は第6トレンチ出土の竪穴式石室の安山岩石材である。

## 第5章 まとめ

大阪府指定史跡忍岡古墳の現状変更に伴う発掘調査は、忍岡古墳の北側墳丘斜面及びくびれ部の保存状態を確認するためのトレンチ調査を実施した。その結果、後円部北側斜面に墳丘主軸の方向に第1トレンチを設定した。第3層及び第4層の土層は、神社関係者によつて、「サカキ」の苗木を植えられた際の土層である。第5層から第8層の土層については、古墳裾部を巻いている擁壁工事の際に掘削機械によって埋められた土である。第9層から第22層については忍陵神社建設に伴う造成時の土砂盛土で、第23層から第35層もほぼ同時期の土砂盛土であろう。第40層以下が古墳築造段階の土層と思われていたが、地山確認のための壺掘り調査で第44層の堆積土層内からコンクリート片が出土することから、下層の第45層と第46層のみが古墳時代の土層である。表土層から約2.6mすべての層が二次的堆積土層であった。梅原博士の調査で報告されている墳丘測量図と昭和49年に四條畷市教育委員会から刊行した四條畷市文化財シリーズ2「忍岡古墳」実測図と比較して結果、等高線が大きく変わることがなかった。

くびれ部の位置に設定した第2トレンチでは、くびれ部の構造および前方部の墳端ラインを確定するために設定したトレンチである。表土および堆積土を約40cm程掘下げると、西側に向かって傾斜する軟質岩盤を階段状に地山を検出された。墳端を示す傾斜変換点を確認された。しかし、葺石は検出されなかった。第12層の堆積土中から土師器片と埴輪片が出土したのみで、確実に墳丘部に埴輪が伴う古墳であるが、葺石は施されていなかった可能性も考えられる。

後円部裾に設定した第3トレンチでは、表面に認められていた橙色砂質土(5YR6/8)は、だんじり小屋工事の際の廃土であった。昭和49年に刊行した文化財シリーズの古墳墳丘部の平面実測図には、このトレンチで確認した西山下地域の人たちの忍陵神社参拝通路がはっきりと確認した位置に図面記載されている。第6層の旧表土から下の層位は確実には古墳築造時期の層位であるが、葺石や遺物を見出す事ができなかった。しかし、第2トレンチと第3トレンチとをつなぐ第4トレンチの北壁断面において、立石を検出した。石は、高さ26cm、幅15cmで角がやや丸みをもつものである。当トレンチで初めての立石の検出であったので、精査した結果、第11層にぶい黄橙色砂質土(10YR7/2)を掘り込んで石を立てていたことが判明した。またこの石を境にして、西側に傾斜角約10度～15度の傾斜が認められる。この傾斜がくびれ部の直交するラインを墳丘全体の中で考えると、後円部の円周状ラインから離れて前方部の直線的なラインへと続していく過渡的な方を示していると理解できる。くびれ部の形態を確定するためにはさらに広い面積での調査が不

可欠であるが、現時点では当トレンチ付近が前方部と後円部をつなぐ連接部分的な形態を呈しているものと判断したい。

第5トレンチは、第1トレンチの約2.6mにもおよぶ深い盛土の平面範囲を確認するために墳丘に平行する方向で第5トレンチを設定した。設定位置が竪穴式石室の縦断ライン北側墳丘部の西側にあたり、第15層のにぶい褐色砂質土（7.5Y7/3）は、傾斜角25度の傾斜をなしている。本来の墳丘斜面と考えられる。

第6トレンチは、第1トレンチのサブトレンチとして第5トレンチ同様に墳丘に平行する方向にトレンチを設定した。設定した場所は、本殿の真北にあたり、以前から墳丘が約40度の急斜面をなしており、本来の墳丘斜面はすでに失われていると考えられていた。トレンチ設定の結果、第18層内から竪穴式石室の安山岩の石室材が見つかり、また、第21層からコンクリート片が見つかり神社再建地に北側に盛土されたと考えられる。

### 墳丘形態の復原

以上述べたように、忍岡古墳の昭和10年の日本古文化研究所の調査での古墳外形略図と位置と外形観察結果をふまえ、昭和49年の四條畷市文化財シリーズ忍岡古墳実測図および今回の合計6箇所のトレンチを設定して墳丘構造の解明をめざした。しかし、後世の改変は予想以上に著しく、また、斜面には樹木が茂り、必要な場所にトレンチを設定できなかったことも重なり、充分な復元案ではなく、細部には依然として不確定な要素を残している。特にくびれ部の構造については、西側に第2トレンチと第4トレンチの状況から後円部の円周から離れて前方部の側辺ラインに移行するあり方と考えられる。また、竪穴式石室の縦断ラインを北に延長すると前方部の先端部分には大正寺の鐘楼が中心ラインに位置する。従来から竪穴式石室が墳丘中心部から東側によっていると思われていたが、第5トレンチの傾斜角とくびれ部を総合した結果、これまでの手鏡式の前方後円墳でなく、撥形に開く前方部の可能性を考えられる。

# 報告書抄録

フリガナ	シジョウナワテシナイセキハックツチョウサガイヨウホウコクショウ
書名	四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書
シリーズ名	国庫補助金事業
著者名	野島 稔
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-8501 大阪府四條畷市中野本町1番1号 TEL 072-877-2121
発行年月日	2006年(平成18年)3月31日

所取遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
忍岡古墳	四條畷市 岡山	272299	北緯 34° 44' 16" 東経 135° 38' 58"	平成17年11月14日 ～11月23日	27m <sup>2</sup>	古墳墳丘部 及びくびれ部の保存状態確認

所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
忍岡古墳	古墳	古墳時代	竪穴式石室	円筒埴輪	撥形の前方後円墳確認

# 図 版

図版 1 忍岡古墳周辺航空写真（昭和十七年撮影）







図版4 第三・第四トレンチ調査スナップ



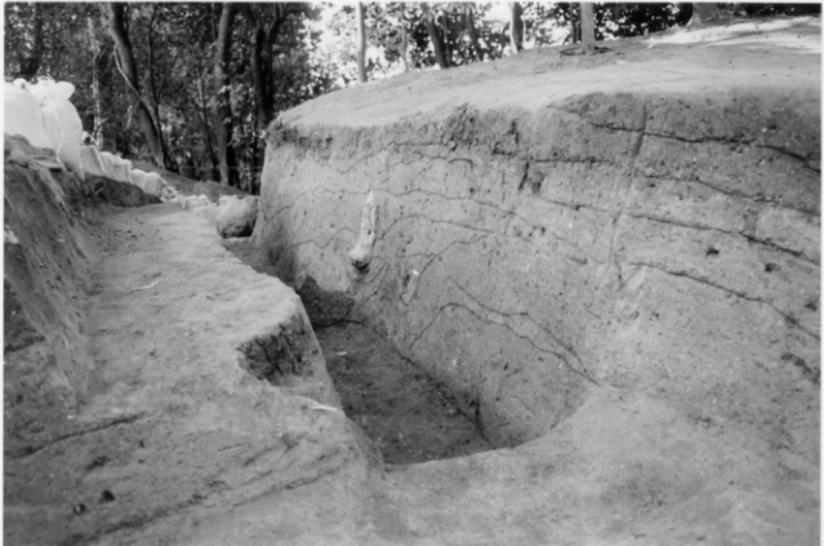
図版 5 第一トレンチ完掘状況



図版 6 第二・第三トレンチ完掘状況



第四トレンチ完掘状況



図版 8 第五トレンチ完掘状況

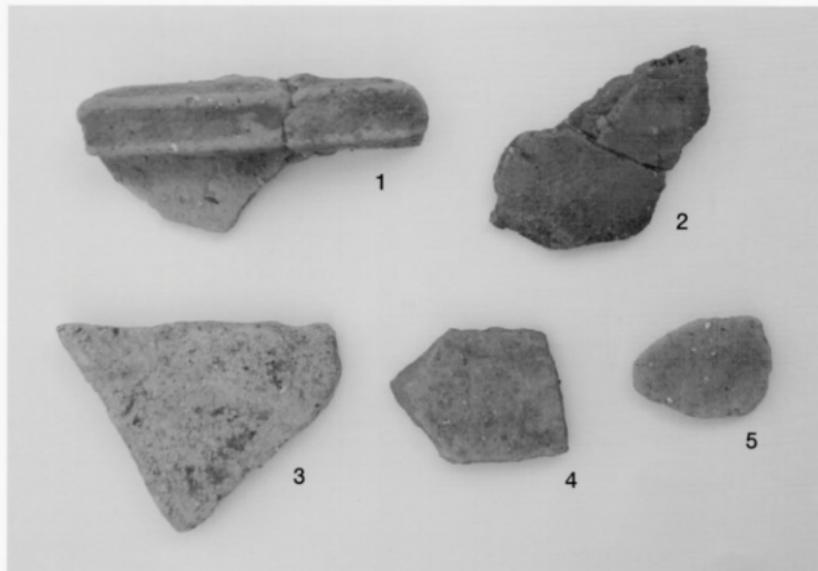


第六トレンチ完掘状況

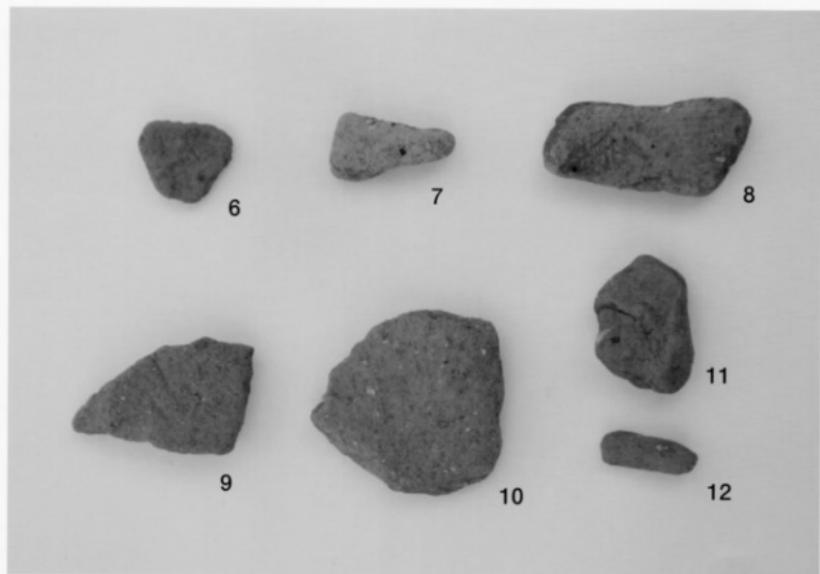




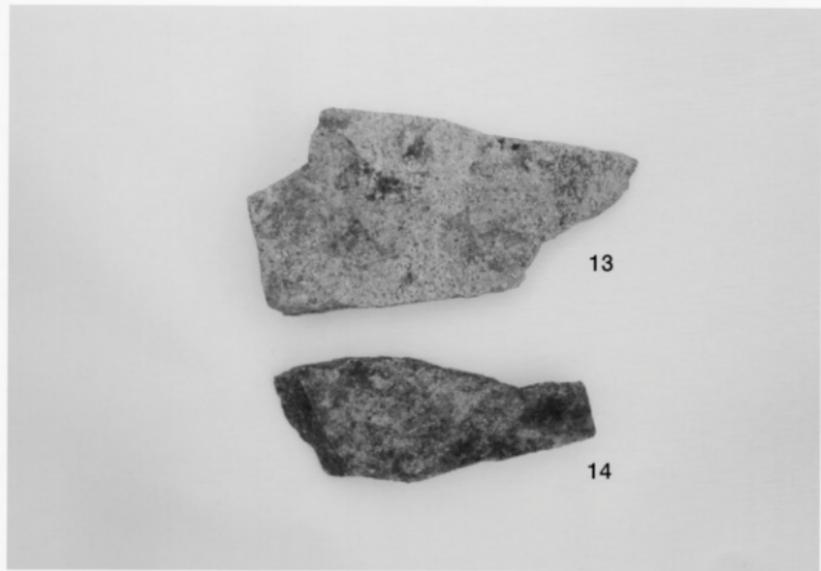




第一・第二・第六トレンチ内出土遺物



第六トレンチ内出土石材



四條畷市内遺跡発掘調査  
概要報告書

平成18年3月発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会  
四條畷市中野本町1-1

印刷 川西軽印刷株式会社